

不完全とは心の中の余白

先日、アメリカの野球殿堂入りを果たした元メジャーリーガーのイチロー選手は、記者の投票が満票ではなかったことに対し、「不完全であるというのはいいなあ」と思いを明かし、「生きていく上で、不完全だから進もうと思うだけで、改めて考えさせられる、自分を見つめ、向き合えるのはよかったですと思います。」と力を込めてインタビューに答えていました。

すでに現役を引退し、年齢的にも体力の衰えを感じてしまうはずなのに、今でも、トレーニングを続け、精力的に野球の普及やプロ野球界の発展に力を注いでいるのは、どこか欠けていることの自覚があるからこそ、なせる業なのかもしれません。

皆さんは、未完成や不完全に美意識があることを知っていますか。例えば、直ぐに思い浮かべるのは、日光東照宮の有名な逆さ柱です。完成と同時に崩壊が始まることを恐れた徳川家康の思いが込められています。明治時代の思想家・美術評論家である岡倉天心は、「本当の美しさは、不完全を心の中で完成させた人だけが見出すことができる。」と名言を残しています。

このように、未完だからこそ湧いてくる「完成させたい」と思う直向きの気持ちは、私たちの生活にも置き換えることができるのではないのでしょうか。

令和7年2月、茶道部の活動を見学に和室へ向かいました。茶の湯に深く根差している美意識に「わび・さび」の言葉があります。「さび」とは、鉄が劣化して錆びていく様子を古びて味わいのある個性として楽しむ精神のことを意味します。一方「わび」は、寂しさや悲しさを表現する以外に、「足りないものは美しい」と思う精神のことです。自分の置かれている状況を悲観することなく、思い通りにならない状態を受け入れて、むしろ楽しもうとする心の豊かさを表し、安土桃山時代に千利休が「侘茶」として完成させ、今に伝えられています。

さて、稽古場へ一歩足を踏み入ると、作法を間違えないようにお茶を点てようと努力する生徒の姿がありました。お点前が肅々と進められてはいるものの、不安になると手が止まり、助けを求めるかのように師匠の顔を見て苦笑いしています。「失敗しても、間違っても、全てがお勉強ですよ。」あえて言葉に出さない師匠の優しい笑みがこぼれると、学びの匂いとなって場を和ませていました。私も思わず口元が緩んでしまいましたが、丹精込めて点てたお茶が差し出されるとどうやって飲むのか分からず、「お点前、頂戴いたします。」と心の中で呟くも両手で茶碗に触れてしまい、思わず「熱！」と叫んでしまいました。恥ずかしさを隠しながら抹茶を飲み干すと、残った小さな泡粒がうまくできない自分の不甲斐なさを笑っているかのように見えました。



厳しくも優しい茶道の世界は、自らを完璧ではないと思う心の余白があるからこそ、もっと学ぼうとする意欲が次の一步を踏み出すのでしょうか。

季節は冬、茶道部の見学を終え、学校を出た時、すでに外は暗くなっていました。ふと夜空を見上げると、三日月が見えます。完全な形の満月よりも欠けている月の方が、特段輝いている気がしました。イチロー選手の言葉がきっかけではありましたが、私自身、今、自分に足りないことを埋めようとするのではなく、この余白を自分自身と受け止め前へ進もうと決意しました。